教育実習ノート

Yさんから K先生へ

○月○日（木）くもりのち雨　みどり組

。お誕生のお友達の仲間に入って、しげちゃんも始終にこにことして嬉しそうだ。紹介が終ると、走って外へ出て行った。いよいよ音楽劇の「仲よし蝶」なので、外に誘いに行った。「太陽になる？」と聞くと、ついてきたので、お面をかぶせ舞台に立たせた。花や蝶が舞い、二人の太陽が、両手をキラキラとさせて音楽に合わせて出てきたが、しげちゃんは両手を前に組み、じっと立っている。先程の笑顔はそこにない。「やらないと先生困るのかな」と、やさしいしげちゃんは私に応じてくれたのだろうか。きつく組んだ両手がそれを語っているようだった。

午后から、しげちゃんと、ぶらんこのところへ行くと、ひでみちゃんが泣いていた。「どうしたの？」と聞いて、鉄柵に腰をおろしていると、しげちゃんが……を何回も繰り返した。それからは、こぎながらずーっと口ずさんでいた。

K先生からYさんへ

○お誕生会も、いつもあのような形でいいのだろうか、と悩みます。スープとサンドイッチで、お誕生日の母子がマナーも心がけて、先生と一緒に会食でもできるといいのですが……。先生方がやった「赤ずきんちゃん」静かに見ていましたね。表現の上手・下手より、やはり真剣にやっている表情でしょうか、「先生方のチームワークのよさが、自ずから子どもの心を育てる」と、会のあとの懇談会で、お母様の一人が園長に話されたそうです。

「仲良し蝶」やるから先生ピアノ弾いて、とよくせがまれます。楽譜をガサガサめくるのでは雰囲気がこわれてしまいます。せりふも人気があるので、テープに入れるわけもいきませんし、できれば、電気を通さない音をきかせたいし、幼稚園はすべて、暗譜でなければ通用しない世界です。子どもの動きを見ながら弾きたいと思います。

しげちゃんは、声をかけても、誘わないでよかったように思います。何でもがまんしてしまったら、なんの為に保育していたかわかりません。やはり「したくない」という自分が出せる場が必要でしょう。

Yさんから K先生へ

○月○日（木）　みどり組

○雨の晴れ間に、ためらいながらぶらんこをかけるが、乗りたい子ども達が、「ワーッ」と集る。四つのぶらんこの一つで取り合いが始まる。最初のうちは見ているが、なかなか

子ども同志では解決することができないようなので、「ほら、こんなに乗りたいお友達が待っているでしょう。数をかぞえて順番にしましょう」と言うと、上手に交替ができた。年少さんばかりが集まっていたこともあって、しげちゃんが、きょうはとても面倒見がよいのが目につく。順番というと、自分から列の前に並んだり、お友達の回数も数えてあげたり、お兄さんぶりを発揮していた。

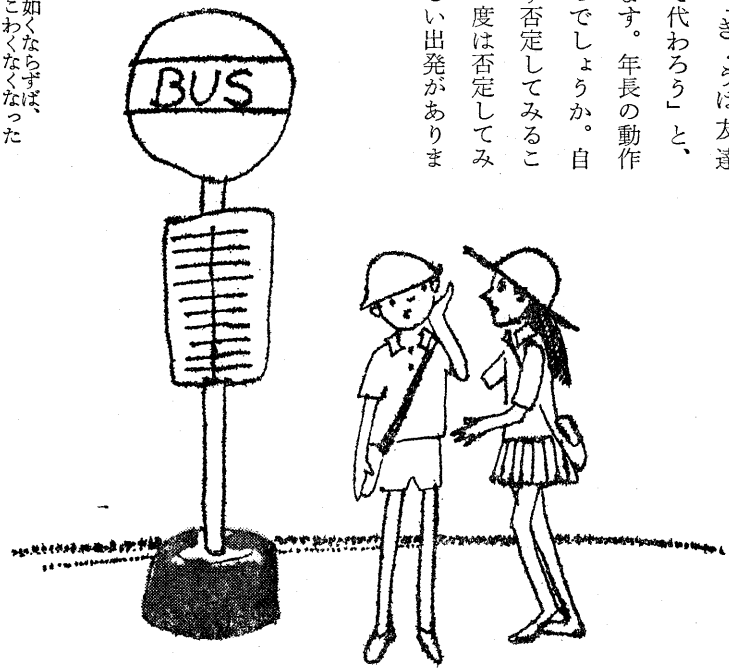
お弁当のとき、しげちゃんが、私の卵焼きが欲しいというのであげると、たえこちゃんが、「Y先生のなくなっちゃうわよ」と言う。「大丈夫よ」というと、私のお茶が減っているのを見てつぎたしてくれる。今度は、横で見ていたみちひさちゃんが、ついでくれる。それを見ていたしげちゃんも、「ぼくも入れてあげる」と、なみなみとついでくれた。おかげでお腹もいっぱいになった。

帰り道で突然「先生」と子どもの声、「どこの先生かな?」とふと見ると、ゆうこちゃんが勢いよく走ってくる。私のことだと思ったのはその時だった。週に一日でも、自分の勉強の為にきているのに、子ども達から見れば先生なのだ。道で屈託なく声をかけてくれたゆう子ちゃん。私に今の立場を自覚させ、「これからこの道を進んでいこう」と、決めた私を元気づけてくれた子ども達に感謝しよう。

K先生からYさんへ

○まだ五月なので、ぶらんこも数えてあげたりしますが、「二十乗ったらかわるのよ」と

言う言葉はどうでしょうか、「きょうは友達が待っているからこのへんで代わろう」と、子どもは自分の意志で降ります。年長の動作が、年少を引っぱっていくのでしょうか。自分の「言葉」一つにも、先ず否定してみることです。自分の行為でも、一度は否定してみることです。そこから又新しい出発があります。

五月号五〇頁
六月号五三頁
に訂正します。

如くならむば→如くならずば、
こわくなった→こわくなくなった